SOWER

ソア＝種まく人
No.9
December 1996
財団法人
日本聖書協会

特集 **聖書を聴く** 聖書全巻通読リレーの三教会に聞く

神のことば
すべての人の
いのち

今年のクリスマスは
聴く聖書、見る聖書。

★贈り物にはCD聖書を。セット特別価格にて発売中★

新共同訳 録音聖書CD版

●旧新約全巻セット
通常価格194,000円→**特別価格136,000円**(税込)
全巻収納「木製ラック」プレゼント

●旧約全巻セット
通常価格145,000円→**特別価格102,000円**(税込)
CD「イエス・キリストの言葉50選」プレゼント

●新約全巻セット
通常価格 48,600円→**特別価格34,000円**(税込)
CD「詩編抄」プレゼント

(これは聖書の朗読です。BGM等は入っておりません。)

贈り物には絵本聖書を。

幼稚園・保育園・教会学校の教材に最適!

全12巻好評発売中　定価 各824円(税込)

●ザアカイ●しんせつなサマリアじん
●ノアのはこぶね●ヨナ
●ダビデ●かえってきたむすこ
●あらしをしずめたイエスさま●よみがえられたイエスさま
●しゅつエジプト●イエスさまとおでしさん
●せかいのはじめ●イエスさまのたんじょう

財団法人 日本聖書協会
〒104 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3567-1987(ダイヤルイン) FAX. 03-3567-4436

●ご注文はお近くのキリスト教専門書店、または全国の書店へ
(直接当協会にご注文戴く場合、別途、荷造送料がかかります)
●カタログ請求、お問い合わせは左記まで

SOWER ソア No. 9　1996年12月1日発行〔年2回6月・12月発行〕
発行・財団法人 日本聖書協会　〒104 東京都中央区銀座4-5-1　電話 03-3567-1980　振替 00160-2-18410

この雑誌は
エコマーク認定の
再生紙を
使用しています

新聖書の世界 ⑨

写真／文 横山匡

ユダ山地はぶどうの産地

ベツレヘムからヘブロンに下る道端で、ぶどうやいちじくを売る兄妹がいた。驚くほど甘くておいしいぶどうであった。谷に下りてたわわに実るぶどうを見せてもらった。棚もなく、添え木すらなく、地面に自然にはわせ、石の枕がしてあるだけである。古代からこの地独特の栽培法だと聞いた。

この辺りはエルサレムより高く標高は九百メートルほどある。乾季の夏でも湿気を含んだ西風が夜露をたっぷり降らせて作物を潤してくれるという。

露店のテントに戻ってくると、兄妹の母親が煮豆をピタパンにはさんで、お昼をご馳走してくれた。兄は父親のぶどうの運搬を手伝い、妹は母親の干しぶどう作りを手伝う働き者だった。ベツレヘムに住むアラブ人の一家であった。

イエス誕生後、エジプトに避難した聖家族もこの道を通ったのであろう。

●マタイによる福音書2章13節―15節

The World of the Bible "Grapes on the Judean Hills"/ Photo & Essay by Yokoyama Tadashi

巻頭聖句

恐れるな、わたしはあなたを贖う。
あなたはわたしのもの。
わたしはあなたの名を呼ぶ。

（イザヤ書　43章1節）

天地万物の創造主であられる偉大な神がこう言われる。
「恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。
わたしはあなたの名を呼ぶ」と。何と幸いなみ言葉であろう。
私はかつて自分の生まれ育った境遇を思い、自分をいたく卑下していた。それが
いつしか劣等感となり、ついには強烈な自己嫌悪に自らを追い込み、
極めて厭世的な人間にしてしまっていた。
ところがあわれみ深い主は、そのような中から私を見いだし、その尊いみ救いの中に
招き入れてくださった。その上、全能にして至高なる主は、こともあろうに
かくまでいじけてしまっていた私に対して、「あなたはわたしのもの！」と
名指しで呼びかけてくださるとともに、み子の尊い血潮をもって贖ってくださった。
この大いなる事実を知った時、私の人生は一変してしまった。人生ばかりか
人間性そのものまでが。それ以来、私はこの聖句を
「神の愛のラブ・コール」と呼んでいる。

峯野龍弘
ウェスレアン・ホーリネス教会連合 淀橋教会牧師

CONTENTS

Sower
No.9
1996

2 特集 聖書を聴く
聖書全巻通読リレーの三教会に聞く　外村民彦
7 聖書朗読を聴く
8 神のことばすべての人のいのち
9 総主事室　佐藤邦宏
10 エッセー⑨ 鳥羽季義「ヒマラヤのふもとで」
12 歴史接写 旭川聖書館　福島恒雄
13 聖書図書館蔵書シリーズ―⑥ ケルズの書

Bible Verse & Essay by Rev. Mineno Tatsuhiro

Faith comes by hearing

特集

聖書を聴く

聖書全巻通読リレーの三教会に聞く

外村民彦
元朝日新聞編集委員

最終日、黙示録の最後は全員で朗読した。（カトリック小金井教会）

教会の礼拝堂の説教壇には、必ずといっていいほど、分厚い聖書がおいてある。全ページが金色にふちどられているのが、信者たちの席からもよく見える。重々しい感じがする（たしかに重い。七キロあるそうだ＊）。いったいこの講壇用聖書は、全ページを開いて読まれることがあるのだろうか。礼拝のとき司式者が開くくらいのものではないだろうか。いつも私は、そう思って見ていた。

「いや、飾りにしておくだけでは聖書に申し訳ない。もったいないから、聖書全ページ六十六巻、千百八十九章を、みんなで読んでみようじゃないか」と、実行に移した教会が一昨年から去年にかけて、三つある。大したものだと思う。――そこで三教会を訪れて、「通読リレー」の体験や成果をうかがってみた。開催順に紹介しよう。

＊筆者注はハキロ

二人一組で三十分登壇

日本キリスト教団　宇部緑橋教会

山口県宇部市常盤町一―一―九

九四年四月三十日（土）～五月四日（水）の大型連休の五日間。九十六時間二十七分。

「教会にはお祭り的な要素が乏しいから、聖書全部をリレーして昼夜ぶっ通して読んでみようと、イベントを考えていました。二〇〇〇年がいいかなとも思いましたが、教会創立七十周年記念として取り組んでみました」。

トップを切った陣内厚生（じんのうちあつお）牧師は語る。

「このリレー通読によって信仰告白にも通ずる、連帯感のようなものがみんなの間に起こるのではないかと思っていました。しかしいざ信徒に提案しましたら、けげんな顔をされましてね。夜中の時間に読む人がいなかったらどうするんだ、とか」。

たしかに、「聖書全巻リレー朗読会」と銘打って、日程表を教会玄関のホールに掲げたのだが、どの部分をいつ読みたいか記入してもらおうとしても、申し込みはさっぱりなかったという。

この教会の通読の特徴は、「二人一組で一人が一章ずつ読み、交代で三十分受け持つ」という方法をとったことだろう。一人何コマでもいいことにした。通読中の写真を見せてもらうと、高齢者はイスに腰掛けている。これも一つの大事な配慮だろう。また、深夜は若い教会員たち数人が中心になった。

四月三十日正午、開会の祈りとともにスタート。昼夜休みなくつづけられ、翌五月一日の日曜日の礼拝の間は、士師記、ルツ記、サムエル記上などを、礼拝出席者全員が輪読していった。

実行委員をつとめた木村道江さんによると実行委員八人が六時間ずつ当番を受け持ち、昼間の読む人が少ないときの穴埋め役をつとめたという。「それでも、終わりころには、読みたい人が結構多くなりました」。

城和子さんは「私は二度、朝に読ませてもらいましたが、未信者の息子夫婦に『読むことが大事』と声をかけましたら、連休なのにどこにも行かずに教会に来て、詩編を読んでいました。これには感激でした」と言い、二十八歳の三好雅宣さんは「その年のイースターに洗礼を受けたばかりだったので、いい記念になりました」と語る。

佐々木恵一さんは八十歳の高齢ながら、四回ほど登壇した。「この通読のことについては、私はそう心配していませんでした。自分で何度でも読もうと思っていたし、できることが感謝でしたから」と、〝長老〟としての責任を感じていたようである。

この催しのことは、始まったころに、いくつかの新聞に掲載され、「私も参加させてほしい」という希望者が訪れたり、また、町のある商店主が「新聞記事を読んで感動したから」と、シュークリーム五十個の差し入れもあったとか。

五月三日午後一時から新約聖書に入り、四日正午すぎ全部が終わった。終了直後に感謝の閉会礼拝と聖餐式が行われた。

参加延べ人員は四百七十四人、実人員は百十八人。このうち十四の教会から二十八人、外部の人が三人。最年長者は八十六歳、最年少者は中学一年生の女子であった。

大韓教会からの参加者は韓国語で、台湾出身の人は台湾語で、アメリカ人のカトリック神父は英語で、それぞれ読んだ。国際的なリレー通読会でもあった。

「最終日には、もう一回読みたいという人がぞくぞくと集まってきましてね、ヨハネ黙示録のころには五十人もいました。いよいよ秒読み段階となって、〝みことばの聖火リレー〟もエルサレムに向かってひた走るようでした。最後の第二十二章は全員の斉読となって、感動の一瞬でした」。

陣内牧師は感慨深そうに話した。

参加者ノートから。「朝七時、すがすがしい気持ちでヨブ記を読む。みんなで一つに向かって事をするのは、私の信仰にとっても大変力強いものを感じる。夜通し聖書の言葉が読み通される教会の中のすべての人々、外部からの人々に感謝。最後まで神の導きが豊かにあるように。感謝。　5／2　奥野京子」

「始めは、あんな高いところで読むなんてと少しドキドキしていましたが、読んでいくうちに慣れて、聖書を声だして読むのもなかなか気持ちいいぞと思うようになりました。最初この計画を聞いたとき、なんてムボウなと思いましたが、皆でやればこんなすごいこともできてしまうんだという思いです。もう少しだ。がんばりましょう。　5／3　高田まゆ」

友人の結婚披露宴帰りに晴れ着のまま登壇。（日本キリスト教団宇部緑橋教会）

読み終えた旧新約聖書の各書のタイトルなど。（宇部緑橋教会）

聖書朗読をする畑山牧師。（日本バプテスト同盟気仙沼教会）

参加者に渡されたカード。（気仙沼教会）

一章読んで百円献金

日本バプテスト同盟 気仙沼教会

宮城県気仙沼市反松二―四

九五年五月三日（水）～七日（日）。九十六時間六分。

「宣教百十年の記念事業としてです。百十年前の伝道者たちは、どういう思いでこの地に伝道をしたのか、そこに思いをはせたとき『聖書全巻リレー（チャリティー）通読会』をせざるをえませんでした」

と畑山廣文牧師は語る。九四年春に着任と同時に、講壇聖書を新共同訳に切り替えたのだが、全ページを開く機会をつくりたかったのだという。

宇部の教会と同様、通読のための一覧表を玄関ホールに掲示した。「詩編二十三章はぜひ私に」といった予約はいくつかあったものの、やはり最初は半分も埋まらなかった。それで、畑山牧師と伝道委員長の花山修一さんとで「とにかく五日間がんばろう。血をはいてでも」と話し合っていたそうだ。悲壮な意気込みと、周到な準備が必要であることをうかがわせる。

「一人三章で十五分をとったのですが、その時間調整が大変でした。たとえばヨシュア記には人名や地名がびっしりで、時間を食いました。次の人が一時間も待ったりして気の毒でした」

と、畑山牧師。ところが詩編やヨブ記、ミカ書などでは予定より時間が早くなって、そんなときは次の人が来るまで待たないといけなくなる……。

「結局、うまく運べば、予定よりは四時間は短縮できそうですね」。

この教会での特徴は、一章読んで百円の献金をすることだった。「読めば読むほど金がいる」という矛盾が出るわけだが、全部で十万円ほどが集まり、震災を受けた神戸に聖書配布する聖書協会の事業にささげた。

最初の創世記第一章は全員で読み、最後のヨハネ黙示録も日曜礼拝のさなか、全員で読んで終了する形となった。結局八十三人が参加。そのうち気仙沼教会員は五十人だった。

一人で何回も参加している。入駒佳延さん二十八回、礼子さん十五回の夫妻を筆頭に、十回以上の人が十人もいる。

仙台に近い宮城県利府町の利府教会からは、車で二時間余もかかるのに、何回も参加があり、とくに土曜日の夜には五人がかけつけて連続して読んでくれたという。

また岩手県東和町の老人ホームからは九十歳近い人たち六人の「テープ参加」もあった。さまざまの形の応援参加があったことがわかる。

「差し入れ歓迎」などとは言わなかったのに、多くの差し入れがあって、ある意味では五日間の〝徹夜合宿〟という雰囲気だったとも言えるようだ。

全ページが開かれた講壇聖書の末尾には、参加者全員の名前と、読んだ個所とが記入されている。

読むことはしないが、聖書を持って聞きにだけ来る人もいたそうだ。聖書には「聴く」伝統があるし、「聖書は心の中で聴くもの」を実践した人々だろう。

花山伝道委員長は振り返って、「参加者がない夜は、牧師と二人、五日間を泊まり込んで、と思っていました。参加者たちには、どうか明日もつづけられますようにという祈りがあったと思います。それが大きい力となっていたと思います」と語る。

参加者ノートから。「創世記三〇～三二章、出エジプト記二三～一五章　突然の飛び入りを快く受け入れて下さいましたことをまず感謝いたします。この取り組みに果敢に向かわれている教会全体の雰囲気に、生きた聖書という実感を持ちました。ともかく生き生きした教会、聖書をこれからも持ち続けられますよう、お祈りします。私たちの教会のためにもお祈り下さいませ。寺本修子（注・カトリック小金井教会）」

「四日午前〇時～五時　洗礼を受けて今年でちょうど二十年になりますが、これを機会に聖書を開いて神様の御言葉を一つでも多く学ぶ時間を持つよう、努力してみます。窓からはすがすがしい朝日が差し込んでまいりました。気持ちよい朝を迎えられたこと、感謝いたします。小野寺　誠」

「五月六日　あと一昼夜、ついにここまで来たかという感が深まった。きょうは私ども夫婦が三十五年前気仙沼教会で結婚式を挙げた記念日である。一番うれしかったのは、昨夜、息子が何回もこの通読に参加したことである。高橋脩」

聖霊が聖堂に満ちあふれた

日本カトリック 小金井教会

東京都小金井市桜町一―一―一〇

九五年十一月十四日（火）～二十日（月）の七日間。日曜日以外はまったくのウイークデー。徹夜は避けて、午前七時から夜十一時四十五分までだった。

小教区二十周年を記念して、吉川敦神父が「聖書全巻リレー朗読会」として実施に踏み切った。日本聖書協会の「SOWER」誌で宇部緑橋教会のことを知り、さらにキリスト新聞で気仙沼教会の予告を知って、いよいよ実行に移そうと、教会から代表を気仙沼へ送って、実際の様子を〝見学〟した。

吉川神父には、それまでに長い間の下地があったそうだ。

「M・ルドールズ神父が七四年から全聖書を読もうという『聖書百週間』運動を始め、私もこれにしたがって神学生のころから個人的に通読をしていました」

と、長年、ちみつに聖書通読の研究をしていたことを説明する。しかしやはり、「大丈夫かな。空白ができたら困るな」と心配だったようだ。

三百八十六コマに対して、二百三十九人が参加した。カトリックの人は二百十二人で、このうち百六十七人が小金井教会の人々。また二十七人はプロテスタント教会からであった。十か所の教会の牧師に直接会って呼びかけ、聖公会からは十三人が参加したという。エキュメニカルの活動がここにもある。

「あるプロテスタントの教会からは牧師さん夫妻と信者ら五人が赤ん坊も連れて来られた。途中、車が渋滞して時間に間に合いそうになく、中断しようかと思ったほどでしたが、間に合いました。これには頭が下がりましたよ」と吉川

掲示板の一覧表に申し込み者の名前が埋まっていく。（カトリック小金井教会）

終了後のミサに参加した教会員全員で。（小金井教会）

神父。

朗読者は、早朝は案外よかった。朝のミサがあるし、隣の桜町病院に診察券を出してから朗読に来る信者がいたりしたから。夕方四時から六時までが最も少なく、聖ヨハネ修道会のシスターたちが入ってくれた。「みんな燃えていた」という。

世話人名簿を見ると、四十九人の名前が並ぶ（うち男性十四人）。七日間の全日程を通じて、五人が一組となって三時間交代で世話に当たり、さらにその後ろでは、吉川神父ら六人の相談係が、やはり三時間交代でリレーしていた。

「世話係がしっかりしていたから、会堂の雰囲気はよかった。聖霊に満たされた空気のかたまりにすっぽりと包まれていた感じでした」と、一人のシスターは語る。

ある人は、一週間全部、夕方来て夜中の最後まで聴いていたそうで、やはり「聴くことの大切さ」がここにも感じられる。病院の帰りに寄った人が「力を受けた。いつもと全然ちがう空気に、しばらく釘づけになった」と話していたそうだ。

「短い人は七分くらいでしたが、最高は一人二十九分かかりました。一時間遅れてしまうと収拾がつかなくなるので、できるだけ早く早くと頼みました。しかし実際は早く終わりすぎて、最後の四、五人はゆっくりと読みました」と、神父は時間調整が大変だったようだ。

参加者の最年少は小学校四年生の女子で、一章を読んだ。また、八十歳前後のシスターや信者たちがテープ参加したという。

「この事業を着々と準備された吉川神父の情熱と熱意こそが、成功の原動力だった。この通読をとおして、ほんとに信者が親しくなりました」と実行委員長の石島武一さんは語り、リーダーの意気込みが中心になることをわからせてくれる。また、この通読会のあとカトリックとプロテスタントの交流がさらに進むという収穫もあった。

参加者のノートから。「私の四人の家族のうち三人がこのリレーに参加しました。一人だけ参加しなかったのが祖父。祖父は子供のころからの信者でありながら、あまり聖書を読む姿を見たことがありませんでした。ところが私が朗読した日から、一人で通読しはじめたのです。『みんなも読んでいるから』と照れ笑いしながら言った祖父は今も、暇さえあれば読んでいます。金田まなび」

「預言者が律法の書を人々の前で読みあげていた旧約の時代を頭に描きつつ朗読させていただきました。私たちは子連れグループでしたが、交代で保育することで守られましたし、新共同訳による聖書でカトリックとの親密度が深まった実感を得ることができましたから、実りある一日でした。カンバーランド東小金井教会　萩生田順子」

聖書通読リレー大会を、二〇〇〇年に全国で開催したいと思います。　編集部

聖書朗読を聴く

昨年『新共同訳 録音聖書CD版』（旧新約）が完成した。朗読は第一線で活躍中の十一人の「声のプロ」の方々によって、「傍らに座る人に読み聴かせるような気持ちで」情熱と誠意をもって取り組まれた。学生時代に失明の危機を通った経験から、目の不自由な方々に聖書を伝える働きに是非参加したいと名乗り出て来られた女性アナウンサー。聖書の朗読は本当にこれで良いのかと、最初に担当したCD完成後ステレオを新規購入し、自身の朗読を何度も聴き直して次の書の収録に臨まれた大ベテランの男性声優。アッシジを旅し史跡を辿って受けた感動を朗読に込めると語りつつ、極寒の二月に暖房を入れぬ収録ブースの中で終始笑顔で奮闘してくださった女性声優。そのような収録時の逸話は数えきれない。

収録と編集の作業に携わったあるスタッフは、「毎回三時間の収録そのものが聖書研究だった」と語る。私たちは教会や個人で聖書を読む場合、思い込みを持って読み進むことが多い。それ故、他人が異なったイメージで読んだ時に躊躇することがある。CDは、そうした聴き方に対して別の角度から光を当てるのに一役買うことができるだろう。

日本基督教団鎌倉雪ノ下教会の加藤常昭牧師が、FM放送で詩編の朗読を聴かれて「聖書は聴くだけで理解できる」と衝撃を受けられたことがあるそうだ。また、カトリック教会で第二バチカン公会議の際に出された典礼憲章には、「キリストはご自分のことばのうちに現存し」、「聖書が教会で読まれるとき、キリストご自身が語る」、「福音朗読は、ことばの典礼の頂点である」といった言葉がある。これらの例は、聖書を聴くという事柄の重さを教える。

かつて聖書は聴くものであった。それは聖書の中にも見られ、七年ごとに全イスラエルに律法を読み聞かせよという申命記三一章一〇節以下のモーセの戒めに起源する。ネヘミヤ記八章一節以下では、エズラが第七の月に夜明けから正午まで男女の会衆に律法を読み聞かせた。現代のユダヤ教においてもトーラーの朗読は礼拝の中心で、朗読者は担当の個所を精読して準備し、朗読する間は直立し、過度にならぬよう明確に言葉を発音しなければならない。

聖書の翻訳に目を転じると、新共同訳や英語のCEVなど、近年内外で「聴くだけで理解できることを特に考慮した」翻訳が目立っている。目から文字を介してつかみ取る理解と、耳から人の声を通して入って来るそれとは、おのずから異なってくる。

幼子に親が絵本を読み聴かせると、小さな胸は満たされる。同様に、祈り心をもって聖書を朗読する時、朗読する人も聴く人も共に祝福を受ける。朗読する人は発音、発声の鍛錬や、また内容を学び吟味することも求められるだろう。しかし何よりも、創造主からの親しい語りかけとして聖書を聴くことによって、聖書の言葉そのものが神の恵みを伝える。

人の声の響きを通して聖書の言葉を味わうことは、いにしえの日ナザレの会堂に響いたイエスの言葉（ルカ四・一六～）を聴くのにも劣らない、私たちに与えられる大きな喜びである。

神のことば すべての人の いのち

聖書協会世界連盟（UBS）世界大会

一九九六年九月二六日から十月三日まで、カナダ、トロント郊外のミッシサウガで、聖書協会世界連盟（UBS）大会が開催され、一三八か国から三七七人の大会議員が集まりました。日本聖書協会から、理事の内貴八郎右衛門牧師（日本フリーメソジスト教会理事長）と総主事の佐藤邦宏が参加しました。UBSの世界大会は、八年に一回開催されるもので、前回は、一九八八年にハンガリーのブダペストで開催され、東欧、ソ連の教会代表の方々が壇上から、連帯の声明を発表されたのがとても印象的でした。その翌年の一九八九年、ベルリンの壁の崩壊は、私たちを驚かせました。今回は、かつての社会主義国の代表、キューバ、カンボジアなどが参加しました。残念ながら、中国、ベトナム、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の代表は、出国の許可が取れなかったそうです。

今度の大会では、二十一世紀への聖書事業の展開を目指して、さまざまな指針が採決されました。また特に、東南アジア、中国、アフリカなど爆発的に人口が増加する国々では、キリスト教人口の増加が顕著で、聖書の需要が増大しています。加えて、自らの言葉で聖書を読みたいという願いに応えるために、翻訳の推進も大きな課題です。これらは、いずれも多額の資金を必要とすることであり、この多大な願いに応えるには、募金により資金を提供する必要があります。伝統的なキリスト教国の教会が、十分な資金対応ができず、本年度だけで、日本円に換算して四六億円もの不足がアッピールされ、アジア、アフリカ諸国でも募金のスタートの決意が示されました。

これから八年間のスローガンは「神のことば すべての人の いのち」です。新しい指針は、聖書協会運動に女性、若者の参加を求めること、ニューメディアなど、新しい分野へ積極的に参加すること、そしてすべての人が求め易い価格で聖書を提供することなどが示されています。

聖書協会は、元来、各国の聖書協会運動がそれを支えています。それぞれの聖書協会が自律性を持ち、UBSの指示で動くわけではありません。それぞれ自ら、この指針にそって政策を決定するのです。日本聖書協会では、この八年間のスローガンを、「聖書で拓こう 明るい心の未来」としています。多くの方々に聖書が届けられること、一人でも多くの人々に聖書が受け入れられることを教会に呼びかけ、宣教の前進のお役に立ちたいと願っています。

大会プログラムでは、さらに、理事長、総主事の任務の確認、聖書協会の諸業務の推進、募金活動などについての理解を深める機会を持つことができました。先のブダペスト大会以後、二十一の新しい聖書協会がUBSに加盟しましたし、さらに八か国の新しい聖書協会創設の準備が始まりました。それらは主に旧ソ連の国々です。

大会のもうひとつのハイライトは、会長選挙です。二代目会長は、カンタベリー大主教コーガン卿、第三代目は、米国のオズワルド・ホフマン師（ミズーリ・ルーテル教会）、そしてドイツのエドワルド・ローゼ師と続きましたが、今回初めて、欧米以外の地域である南米から、ペルーのサムエル・エスコバル氏が選出されました。UBSは、一九四六年に創設されて、五十年の節目の年を迎えました。戦後復興の中、聖書の需要に、十三の聖書協会が協力して応えるために組織されたのです。五十年の節目の年に、新しい会長に、これまでのように、キリスト教の伝統的な欧米の方でなく、南米ペルーの福音派教会の指導者サムエル・エスコバル氏が選出されたのは、特筆すべきことだと思います。理事長はアメリカ聖書協会総主事ユージン・ハベッカー博士が、総主事には現総主事ジョン・エリクソン博士が、それぞれ就任しました。

そのほか、毎日バイブル・スタディが

UBS世界大会に参加した人々。

UBSの新会長に選ばれたサムエル・エスコバル氏。

もたれました。聖書の講義は、優れたもので、参加者の心を豊かに掻き立てるものでした。大会の雰囲気は、聖書協会運動に参加する者を、動機付け、やる気を起こさせてくれるものでした。日ごろ、なかなか会う機会もなく、通信の相手方として顔の見えない仕事をしている者にとって、握手し、抱き合い、名前を呼び合うことは、安心感とやる気を与えてくれます。

大会は、UBSの各聖書協会の理事長、総主事等の参加者の中には、福音派と呼ばれる教会に属する方も少なくなく、ローマ・カトリック教会の代表、ロシア、ギリシアなど正教会からの代表も加えて、あらゆる教会を背景に持つ人々の結集でした。それらが、共に聖書を学び、祈りを共にしたこの世界大会から、何か新しいものが生まれる、そのような思いに満たされて十月六日帰国いたしました。

総主事　佐藤邦宏

◎過去八年の間にメンバーになった聖書協会
（準メンバーから正メンバーになったものも含む）
アフリカ地域＝ベニン、コートジボアール、エリトリア、トーゴ
アメリカ地域＝イースト・カリビアン、オランダ領アンタイル、アルバ、パナマ
アジア・太平洋地域＝マレーシア、南太平洋諸国
ヨーロッパ・中近東地域＝ベラルーシ、チェコ、エストニア、ギリシア、ヨルダン、ラトビア、モルドバ、ポーランド、ロシア、スロバキア、スロベニア、スペイン、ウクライナ

総主事室

キリスト教教育機関と聖書

佐藤邦宏

我が国へのキリスト教の宣教が明治の初期に始まって以来、教育、医療、社会福祉などは、とても大切な教会の働きでした。その後、キリスト教主義学校、幼稚園などが数多く建てられ、多くの卒業生を送り出すとともに、その家族、特に両親に与えた影響も決して小さくありません。もちろん、学問の世界においても大きな貢献をしました。

その中でも特に、聖書を中心に据えた教育は、日本の社会、文化、そして個々人の心の成長に、どれほど深い影響を与えたかは計り知ることができません。キリスト教教育機関の働きは大きく、そして未来にも大きな期待が寄せられます。

ところが最近、キリスト教教育機関で聖書が脇役に置かれる傾向が次第に増加してきました。理由の一つは、日本の教育が、教養、心の成長に役に立つような学科を隅において、仕事に直接役に立つ教育を求める傾向があるからです。聖書の授業などは、真っ先に脇へ押しやられてしまうようです。

たしかに、聖書は、信仰者にとっては日々大切なものであっても、仕事に直接役に立つかどうかと言えば、非日常的なものとしか見えないかもしれません。しかし、実はこのような知識、学習が、人間の真の成長になくてはならない大切なものであるのです。私も人生のたそがれに近付いてみますと、私の人生にもっとも役に立ったのは、実は、このような非日常的な教科であったことがよくわかります。まして聖書です。

日本のキリスト教教育機関での聖書教育は、それらの学校の宝であり、特権であります。最も人間の心に近い教育です。これがなければ、日本人の心の未来は、本当に暗いのです。

エッセー ⑨

ヒマラヤのふもとで

鳥羽季義

世界の屋根と言われるヒマラヤ山脈は、ヒマラヤ（雪の住居）と呼ぶにふさわしく一年中雪に覆われた山々がそびえている。この高山は世界中から来る登山家でにぎわっているが、そのふもとに住む人々は山の神の住みかとして神聖視していたため、長い間登山家が頂上を征服するのを拒否していた。ヒマラヤはその地方に住む人々には信仰の対象であり、神々を恐れて近寄ることすらしない。むしろ登山を好む日本人や西洋人を変な人種と見ていることが多い。厳しい自然に住む人々にとって、ヒマラヤは見て美しいどころか、恐れを引き起こすものなのだろう。

私たち一家がヒマラヤの南側に住むカリンの村に初めて入ったのは今から二十数年前のことである。この村へ入る峠からエベレスト山が見えるが、村人は手前のヒマラヤの山々を見ていても、奥にあるのが世界最高峰であることはだれも気付いていなかった。それもそのはずで、彼らにとって山は山、名前が付いていようがいまいが関係がない。

さて、私たちの関心は、ここの人々はどういう神々を信じて生きているのだろうかということであった。村で生活し、現地語を学ぶにつれて、いろいろなことがわかるようになった。まず彼らは必要にして十分な母語を持っていることだ。人々は山地を生活の場にしているため、上り下りを繰り返している。そのため上下を表す言葉に富んでいて、人だけが動く言葉のほか、物を運ぶ場合には別の言葉を使うという具合である。

一方、この地方にしては珍しい平等社会構造を持ち、言語上の身分の上下もなく、男性語と女性語は全く違わないのに驚く。ただ、よそ者とうちわで使う動詞が異なり、私たちは二年くらいはよそ者扱いであった。彼らは、文字化されていない自分たちの言語は低級だと考えていたようだが、日本語に勝るとも劣らない資質を持っている。口で語り伝えてきた伝説、神話などは、文学的にも決して見劣りしない。彼らの中には詩やことわざ、歌もある。宗教は、日本で知られているシェルパ族は仏教徒であり、他の諸族はヒンズー教徒か、自然宗教と両者の混合したものと言えよう。村には「タムラ」という神話があり、宗教儀式の経典のような役目を果たしていて、冠婚葬祭に用いられている。それを調べてみて驚くのは、創世の記録があることである。神話の初めは、「昔々、天と地が一体となっていた」とあり、天は男性、地は女性と見られている。その天地が離れ、天は天高く上がり、地はそのまま残り、人間が生まれる舞台となる。しかし話は日本の古事記に似たところもある。一体カミなる者がここの人々の心の中に存在するのだろうかと、いろんな宗教儀式に参加してみた。

神々のようなもろもろの霊が実在し、それぞれ名前が付けられ、また人が死ぬとその魂を安住の地へ送る複雑な儀式まである。唯一の神がいるのか、彼らはそのことを意識しているのだろうかと、いろいろな方法で捜し歩いて三年近くたったある日、息子を連れて村人を訪ねたときだった。まだよちよち歩きの息子は、突然畑の端から五メートル下に落ちてしまった。まっすぐに落ちれば岩に頭をぶつけて死んでいたかもしれなかった。近くにいた村人がすぐかけつけて、息子を見て言った。「ニノワムエ　イシェイデキ」（神が見ていた、または守ってくれたという意）。この「ニノワム」という語は以前にも聞いたが、超自然的な状況で使われていて、神話では「神」という言い方では出てこなかった。これ以来、注意深くこの「ニノワム」がどのように使われるか観察し続け、また多くの人々にも聞いてみた。確かに天地を支配し、今も働く方だということがわかった。そこで最初にマルコ福音書を現地語に訳した時、「ニノワム」を神（カミ）という語に使ったが、それで問題は生ぜず、むしろよく理解されるように感じた。日本語の「神」が聖書で意味づけられ、創造神にまで引き上げられたように、「ニノワム」も生ける真の神として、今、村の教会であがめられ、賛美をこの方に捧げている。

鳥羽季義（とば　すえよし）
1938年生まれ。
日本ウイクリフ聖書翻訳協会所属。

歴史接写

横浜、神戸、銀座そして 旭川聖書館

福島恒雄
日本キリスト教団 留萌宮園教会牧師

旭川聖書館はビアソン聖書館として市民に親しまれていた。一九〇二（明治三十五）年頃、旭川の中心街であった五条八丁目左一号仲角にひときわ目立つ洋館として建てられた。十年前に出された旭川文庫（四）にも「旭川市街の今昔」に大きく写真が載せられている。

北海道の伝道に大きな足跡を残したG・P・ビアソン宣教師（長老派）は、聖書学者でもあった。小池創造牧師の著書に詳しく記されているが、一八六一年に米国に生まれ、プリンストン神学校を出て、一八八八（明治二十一）年に来日し、明治学院、千葉、小樽で宣教師として働き、一九〇二年に旭川に赴任した。宣教師館を聖書館（バイブル・ハウス）と命名したのは、一人でも多くの市民に聖書を読んで欲しいとの願いからである。

少年時代に牧師をしていた父からギュツラフ訳の「約翰福音之傳」を見せてもらって日本に関心を持ち、来日して日本語を学んでいたとき、横浜のバイブル・ハウスに行き、H・ルーミス宣教師と出会った。氏からは学ぶものが多かったという。聖書館の構想は、その時から胸に暖めていたのかも知れない。前述の小池創造著の『田舎伝道者―ビアソン宣教師夫妻』には、聖書館を建ててまもなく米国伝道局本部に宛てたビアソンの手紙が載せられており・・・これは、一種の聖書の家である。ウィンドウには聖書の物語が誰にでも読めるように開いてあり、キリストの生涯を描いたテイソの絵が掲げられて、通行人の目を引き、毎朝、聖書のページが新しくめくられている・・・と書かれている。

旭川聖書館　1945（昭和20）年

聖書館ではさまざまな活動がなされ、超教派の集まりや、特別伝道、軍人伝道、廃娼運動が婦人矯風会と共に展開されていた。自由民権運動の指導者、坂本直寛（坂本竜馬の甥）はビアソンと同じ頃、旭川教会（日基）の牧師をしていた。彼の熱心な祈りからリバイバルが起こり、聖書館で超教派の祈り会が持たれていた。その中には、三浦綾子著の『塩狩峠』の主人公の長野政雄もいた。

ビアソンの『略注旧新約聖書』は、二千三百ページの大著であり、旭川で書かれ、北見で出版されたものである。一九一四年、ビアソン夫妻は北見に移ったが、その後、原田幸六、臼井猪之助、矢代正親、飛内司牧師らがその志を継ぎ、戦後も小池直行が熱心な働きをしたが残念ながら閉館のやむなきに至った。

JBS History/ Asahikawa Bible House/ Fukushima Tsuneo

編集後記

今回の特集「聖書を聴く」は、いかがでしたでしょうか。

教会員がひとつになってみことばに取り組み、学び合い、全巻を通読したことは本当にすばらしいものがあります。筆者も小金井カトリック教会の通読リレーに参加して、ヨハネの黙示録17章から20章を担当し、最後に同21章と22章を教会に集った全員で読み終えた時には感動を覚えました。この感動を、多くの教会で味わっていただきたいと思いました。

この通読会で、みことばが先に与えられた者の感謝として捧げられた献金は、まだ、みことばを手にすることの出来ない方々に届ける聖書のために用いられました。

UBSは1997年度（1996年11月）より「神のことば すべての人のいのち」のスローガンのもと、新たなスタートをいたしました。みことばを必要としている世界のすべての人々に聖書を届けることができるように、ぜひ、皆さまのご協力と、ご参加をお願いいたします。（F）

次号予告

（第10号） 1997年6月1日発行

特集 座談会「21世紀を語る」

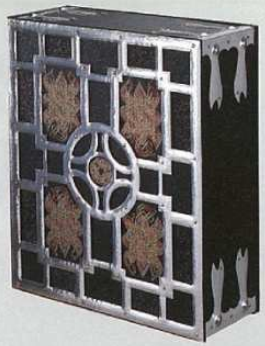
◆ ソアは、会員のための情報誌です。継続してお読みになりたい方は、後援会・維持会にご加入下さい。

● ソア 第9号 DECEMBER 1996
発行＝財団法人 日本聖書協会
〒104 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3567-1980
FAX 03-3567-4436
振替 00160-2-18410
表紙イラストレーション＝本田年一
デザイン＝株式会社デザインコンビビア
印刷＝文唱堂印刷株式会社

聖書図書館蔵書シリーズ―❽

ケルズの書

8世紀（ファクシミリ版）
縦：33cm 横：24cm


収納ケース

初期中世芸術が頂点に達した８世紀に、アイルランドの修道僧たちによって完成したケルズの書は、全680ページにわたって壮麗な彩飾がほどこされている。

本書は、四福音書のラテン語本文（古代ラテン語訳とウルガタ訳の混合テキスト）、４世紀にカイサリアのエウセビウスが作成した福音書対観表、各福音書の梗概、各福音書に関する伝承、ヘブライ固有名詞などで構成されている。

激しい戦火や、略奪が繰り返された1200年間を奇跡的に生き延び、現在アイルランドの国宝としてダブリンのトリニティ・カレッジに保存されている。三大彩色装飾写本の一つであり、ケルト的キリスト教美術を代表するものである。